



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

Member of



UNESCO
Associated
Schools

第二回ユネスコスクール神奈川県大会 報告書

子どもの内的発展に即した ESD 実践の可能性 ～ 地域資源とネットワークで育てる ESD ～

2016年8月27日

於・横浜シュタイナー学園十日市場校舎

文部科学省・日本／ユネスコ・パートナーシップ事業

主 催：神奈川県ユネスコスクール連絡協議会

共 催：東海大学教養学部（ASPUnivNet）

後 援：神奈川県教育委員会／横浜市教育委員会／日本ユネスコ協会連盟／
ユネスコ・アジア文化センター／神奈川県ユネスコ協会連絡協議会

報告書制作：ユネスコスクール・グループ



第2回ユネスコスクール神奈川県大会 報告

日本／ユネスコ・パートナーシップ事業

日 時：平成28年8月27日（土）9:30～18:00

会 場：横浜シュタイナー学園

主 催：神奈川県ユネスコスクール連絡協議会

実行委員長 住田昌治（横浜市立永田台小学校長）

共 催：東海大学教養学部（ASPUnivNet）

後 援：神奈川県教育委員会／横浜市教育委員会／日本ユネスコ協会連盟／

ユネスコ・アジア文化センター／神奈川県ユネスコ協会連絡協議会

参加者：84名

（ASPNet：43名、一般校：14名、UNESCO関係者：7名、行政：3名、大学：11名、市民6名）

【第一部】

横山義宏（ホスト校担当教員）の挨拶、住田昌治（実行委員長）挨拶の後、韓朱仙（ホスト校教員）によるアイスブレイクプログラム「質問ビンゴ」で会場の緊張が一気にほぐれた（写真）。見事ビンゴを当てた1名には韓国のりがプレゼントされた。うち解けた雰囲気の中、ゲスト講師のマーティン・ローソン氏によるキースピーチが行われた。マーティン氏はシュタイナー教育実践研究者としての背景を有している。なお、総合司会は所澤新一郎（ホスト校保護者）が担当した。



〈キースピーチ〉「子どもの内的発展に即した ESD 実践の可能性」

マーティン・ローソン（ドイツ・キール教員養成所責任者）

通訳 内村真澄（横浜シュタイナー学園英語専科教員）



○1994年にスイスのジュネーブで開催された第44回ユネスコ国際教育会議にシュタイナー教育関係者が招かれ、国際的な教育展が世界中を巡回した（日本も）。その公式パンフレットの解説執筆者のひとりとして関わったことを通じて、ユネスコの仕事に関わるようになった。コソボ内戦の復興プロジェクトにも関わり、トラウマを抱えた女性たちの自立を支援し、彼女たち自身が大学の教員となって平和教育に取り組む後進を育てるまでの成果を上げている。

○今回のテーマ「子どもの内的発展に即した ESD 実践」

について、シュタイナー教育の観点からお話したい。シュタイナー教育では、人間の総合的な成長と学びの契機や環境を子どもたちに提供することがその柱となる。学びは複雑な過程をたどるものだが、それを持続可能な変化と行うことができる。知識だけでなく、身体および全感覚を通じた世界との関わりがどのように変化していくのか。環境や他者との関係の変化。そのような変化の積み重ねの先に自分の行動による世界の変化がある。それは、ポジティブな意味で持続可能な社会に貢献できるような教育を提供することに他ならない。

○アマルティア・センがケイパビリティという概念で示した子どもたちの社会的能力（判断力、共感、世界市民感覚、エコロジー）は誰もが賛同するものだが、この20年でそれを実現することがますます難しくなっている。各国政府は確かにESDを支持し署名しているかもしれないが、多くの国で教育政策にOECDなどの経済的機関がつくった教育指針が採り入れられている。そこから評価主義的なあり方や教育を標準化することによる弊害が広がっている。教育とは本来、あらかじめ定められた成果を目指すものでもなく、標準化できるものでもなく、自律的で創造的な複雑系であり、オープンエンドな営みであるはずのもの。

○このような課題に対して、シュタイナー教育の場合は次のようなアプローチをとっている。子どもたちが生き生きと楽しく体験する。ある事柄がどのように体験されるかは年齢によって変わってくる。

○1年生では先生からお話を聞き、絵を描く。お話と絵は世界をひとつのまとまりある統一体として体験させてくれる。昼と夜、太陽と月のような二極性など、世界の根源的な要素をイメージの中に含んでいる。そのようなお話を受け取り、一晩寝かせた後、子どもたちはお話を思い出して語り合う。そこで子どもたちは、ひとつのお話がそれぞれのなかで異なる体験となったことに気づき、多角的な視野を得ることができる。学んだことを忘れるというプロセスが大切。

○3年生になると、クラス全員で農場に出かけていく。そこで出会うお百姓さんから、子どもたちは先生とはまったく違う印象を受け取る。馬が引く鋤を、子どもたち何人なら引くことができるかやってみる。帰りには泥だらけだが、子どもたちは幸せ。ここでも、一晩体験を寝かせた後、ふたたび体験を語らせる。トラクターに興味をもった子どももいれば、馬に惹かれた子どももいる。そうした多面的な子どもたちの会話を通して、教員は物事の本質へと子どもたちを導いていく。

○9年生になると、お話や絵の世界から抜け出す。子どもたちだけで3週間の農場実習を行う。「自分たちだけで大丈夫だから！」と両親に告げてやってきたものの、蜘蛛の巣だらけの宿舎や早朝から続く労働に音を上げる子も出てくる。最初の1週間は、就寝前に1日の仕事の内容を書き留める。これを後で読み返すことは、農場の仕事の多様性に気づき、その多様な仕事を自分が成し遂げた充実感を味わう重要な学びとなる。朝のお茶のわずかな時間の重要さに気づく。2週間目からは、農場の経済がどのように回っているのかを調べる。どれほどのエネルギーを使うのか、トラクターの値段はどれくらいか。そのお金をどのように調達するのか。1リットルの牛乳から、10キログラムの野菜から、どれだけの利益が上がるのか。子どもたちはエンジンを洗いながら、何本エンジンを洗ったらあのトラクターが買えるのかを考える。3週間後、学校に戻り、両親の前でプレゼンをする子どもたちの立ち姿は明らかに変化している。豆だらけの手を誇らしげに示しながら、自分の農場のこのように話をする。

3週間の間に子どもたちは自分のアイデンティティを変化させた。プレゼン時の情熱はやがて冷めていっても、彼らのなかに生まれた農業への尊敬の念や、食肉への意識の変化は一生のものとなる。

○次の年、子どもたちはもっと産業よりの職業分野を3週間で体験する。工場、建築事務所、港湾施設、

空港など。自分のレポートを書き上げた彼らは、異なる分野で実習した他のクラスメイトの体験にも関心をもつ。そして、長い時間をかけて体験を消化していく。

○このように、シュタイナー教育では、ひとつの領域を3~4週間集中的に体験するカリキュラムが基本となっている。解剖学を4週間。幾何学を3週間。それぞれの課題の終了後、子どもたちはその領域についての小さなエキスパートになっている。しかしすぐに別の領域の学びに子どもたちは没入し、それまでの学びは忘れる。「それで大丈夫なのか」と問われれば、「それが学習の重要な要素なんだ」と答える。数ヶ月して、ふたたび同じ領域の学びに取り組むとき、子どもたちは



いったん忘れた「体験」の数々に再びつながりを見いだす。思い出すというプロセスの中で、以前の体験が自分を変化させたことを子どもたちは体験する。喜びと熱意をともなう集中的な時間が自分を変化させたのだと。そこで想起されるものは、ただの知識や事実の思い出ではない。生徒の中に保たれているものは、変化した在り様というべきもの。

○そのような変化は、いままでとは違った考え方や感じ方をもたらす。いままで出会ったことのない状況に適切に対応できる柔軟性と幅のひろさをもたらす。それは知識だけの変化では得られないもの。忘れては思い出すという繰り返しが人を強め、そこから生きる上で役立つ習慣が生まれてくる。人の話に耳を傾ける習慣、秩序立てて体験を思い起こす習慣。

○さらにその先に、ひとつの体験とその他のいろいろな体験を比較し、関連づけるという段階がある。そうやって初めて、私たちは特定の概念を説明することができる。体験を濃縮して、それらを体系づける作業に取り組むことができる。新しい概念、ルール、法則はこうして生み出される。

○これを何度も繰り返していくことが、新しい何かを創造する能力となる。何かを学び、思い起こし、専門家たちの仕事からその領域の理解を深めていく。さらに基本的なスキルを身につけ、専門家から指導を受け、異分野の専門家からも学びながら、最終的に自分自身から何かを生み出せるようになる。

○このような例で示した学びのゴールは、「学ぶことを学ぶ」という地点。ひとつひとつの教科というものは、それぞれが違った角度で世界に開かれた窓のようなもの。美術、数学、化学、文学、それぞれの教科から、子どもたちは違った世界の見方を学ぶ。職業体験もそう。そのような学びを通して、子どもたちはやがて、世界のなかで自分にできること、自分自身の使命とは何かを考えるようになる。この時期になれば卒業は間近。

○低学年の子ども、中学年の子ども、思春期前、思春期後と、彼らは世界の見方をどんどん変容させていきながら、世界の中で生きることを学んでいる。

【質疑応答】

(Q) お話からとても刺激を受けました。劣等感を感じている生徒がいたとしたら、教師としてどのように対応しますか。

(A) 短い時間では表面的なお答えになりますが、まず、それぞれの子どもが「自分は先生に話を聞いても

らえているな」「わかってもらえているな」と感じられるようにすることが教師の重要な仕事。もうひとつは、教室のなかに競争原理を持ち込む代わりに協調を促すことを基本に置くことが大切。競争で全員が勝者になることは出来ないのだから。ただし、自分に勝つのはOK。この課題を自分は前よりも上手にできるか。教員の評価の役割は、その子が前よりもよくなったことに焦点を当てることであり、他の子と比べることではない。ニュージーランドの研究者ジョン・ハッティは、その研究のなかで、子どもの学びがもっとも促進されるのは、教師が子どもたちの状態を見て、自分自身の教育的振る舞いについて自己判断を下す場合であることを示している。自己変容こそが教育者の課題であり、教員グループ全体で取り組むことが大切。

【第二部】

〈パネルトーク〉「地域資源とネットワークで育てる ESD」

パネラー	吉武美保子（横浜市にいほる里山交流センター職員） 小正和彦（横浜市立幸ヶ谷小学校校長） 広木敬子（横浜市立永田台小学校教務主任） 小林裕子（横浜シュタイナー学園教員）
進行	佐藤雅史（横浜シュタイナー学園事務局長）

第一部の内容を受けつつ、そこで示された体験循環型 ESD を実践していくための地域環境に目を転じた。横浜北部随一の里山を背景にした横浜シュタイナー学園、都心部の臨海地域に位置する横浜市立幸ヶ谷小学校、高齢化が進む団地のなかに立地する横浜市立永田台小学校の先生方、そして地域の環境資源と学びを仲介する NPO 職員にお話を伺った。

○吉武美保子氏（横浜市にいほる里山交流センター職員）

横浜市北部に広がる新治市民の森ビジターセンターとして人と里山をつなぐ役割を果たしている。里山公園と言っても地域のなかのハブ機能をもっており、いろいろなニーズを聞いて、「これはこうやるともっといい体験ができますよ」とか「こういう使い方はちょっと。ごめんなさい」という調整の役割を提供している。

○小林裕子氏（横浜シュタイナー学園教員）

その里山を大切にに使わせてもらっている（横浜シュタイナー学園資料 P.14-15）。低学年では森のなかで空気を感じ取ったり、音楽の時間で木の音をきいたりして、感覚を使うことを大切にしている。学園では3年生の時期に家をつくったり、田んぼをやったり、畑を耕したり、職人さんと呼んだりして、成長の節目にふさわしい体験を重ねている。

○小正和彦氏（横浜市立幸ヶ谷小学校校長）

横浜市の中期学校経営方針の中心に ESD を置いている（幸ヶ谷小資料—1）。自分の成長と社会との関



係のなかで社会も変えていく取り組みを行っている。総合的な学習の時間と教科をあわせた「横浜の時間」を使い、すべてのクラスが別々の内容に取り組んでいる（資料—2）。それを冊子にし、それぞれESDのどの視点を大切に活動かを明示している。また、地域と一緒にESDを進めることを目的としてコミュニティスクールになった（資料—3）。資料—4は4年生の取り組み「未来に残そう生き物たくさん幸ヶ谷の海ガイドブック」。レイアウトはプロにお願いしたが、素材はすべて子どもたちが用意。ミッションをもって体験することが大切だと考える。都市部の海にも豊かな生物がいることを知り、そのような環これからの持続可能なまちづくりに関わっていく取り組みをしている。

○広木敬子氏（横浜市立永田台小学校教務主任）

大きな団地のなかにある学校。学校だけではなくて地域のサスティナブルマップもつくろうとした折、地域にまちづくり委員会ができ、高齢化でシャッター街になった商店街を拠点に活動が始まった（永田台小資料）。そこに参加すればマップの材料になると考えた。最初はシャッターを開けるだけだったが、地域の子どもたちも集まってきたら、話し合いの雰囲気さがらっと変わった。イベントのアイデアが出され、運営委員会がスタートして、学校にはイベントの命名とポスター（のぼり）づくりをお願いしたいと。ハーモニカサークル、昔遊び、私たちもちょっとした演奏を行った。この活動がうまくいっているのは、2ヶ月に1度程度のペースで、わたしたち学校も不自由していないし、街の皆さんもできるだけ楽にやりましょうというスタンスがあるからだと思う。

街の高齢化は全国的な共通課題。会場の参加者のおひとりからは、「子どもと活動すると大人も変わるのだから、日中も街にいるお年寄りと一緒にできる活動を柔らかい発想と遊び心で生みだし、学校の中だけでなく街のなかで一緒にできることをともに考えてほしい」という発言もいただいた。そのような地域との連携を、コミュニティスクールという制度を使って行っているのが横浜市立幸ヶ谷小学校。

○小正

自分のなかのイメージは英国などにあるコミュニティスクール。昼間は学校だが、市民教育・社会教育にも使っていて、夕方には併設のパブで酒を飲める。日本の公教育のなかでは難しいが。

幸ヶ谷小の7割から8割は周辺のマンションに移ってきた家庭で、地域とのつながりも薄く各家庭の価値観も多様。そういう人たちが一緒に子どもを育てていく関係をつくるには何が必要かと考え、共通の目標としてESDを持ち込んだ。持続可能なまちを目指して子どもたちがまちのために活動をし、いろいろな人から評価され、その繰り返しにより、どんどん変容していく。コミュニティスクールの取り組みでは、月に1回、日中に老人会の会合を多目的室でやっている。どこかのクラスが関わるかなと思っていたら、案の定、関わり始めた。地域に開かれたというだけでなく、社会に開かれた、すなわち社会の多様なリソースと協働した学校をつくるという意味で、コミュニティスクールを活用している。

ユネスコスクール、コミュニティスクールなど、制度の特徴を上手に組み合わせ、明確なビジョンをもって地域連携の取り組みをつくっている好事例を見せていただいた。参加校の横浜市立三保小学校からも、同様の取り組みについてご報告いただいた。一方で、制度とは別に、地域の連携を媒介する中間支援組織の存在もまた、地域連携の重要な推進力となる。そのような活動として「にいほる里山交流センター」の活動報告に耳を傾けた。

○吉武

戦略的な考えがあった。「新治里山ごよみ」を早い段階からつくって、近隣の学校に配ってきた。何もない、マイナスのイメージしかない場所を、「ここって何だろう、面白そうだね」に変える。来てもらい、知って、気づいてもらい、何かを経験してもらうことで、ここをどう利用しようかというところにつながる。新治小や三保小が面白いことやっているということが広がって、ようやく他の学校の先生方も気づいてくださったところだ。

横浜シュタイナー学園の3年生が竹で家をつくったというお話があったが、昔から日本人にとって身近な竹がいろいろな学年の体験の軸になっている。3年生ではとにかく竹を切ってきて交差させて組む体験。森の手入れをしている新治市民の森愛護会のおじさまたちがお手伝いした。一方、9年生の竹細工では、非常に細かい作業に取り組む。竹細工の先生とボランティアさんで竹ひごをつくる時、表面の皮の薄いところだけにしないと、編むことができない。先生方が何を子どもたちに学んでほしいのかをよく聞いた上で、その作業工程をどうデザインするかをものすごく考える。学校の先生が突然地域のなかでポンと行っても、たぶんうまくいかない。どこか自治会なり地元の方なりのなかでのコーディネート機能が間を仲介しないと、こういった包括的な学びはかなり難しいだろうと思う。

最後に、教育のなかで地域とつながることの要点について、各発言者に思い浮かんだ言葉を残していただいた。

○広木

変わるといふこと。地域と関わる仕事は、はじめはたいへんな仕事だろうなと思っていたが、じつはとても楽しい仕事だった。地域のなかから見えてくるものも多く、そこから自分が変わっていった。「あの人に相談したらいいよ」「ここはこうなっているよ」とか、そういう関わりが面白い。それが学びだと思うし、子どもにとってのそういう瞬間もみつけてあげられるようになる。

○小正

今日のマーティンさんのお話にもあったが、これから必要な力として他の立場を理解する能力があると思う。本当に持続可能な社会、持続可能な世界をつくるために、さまざまな多様性を認め合うことが前提であり、最終的にはグローバルシチズンシップの視点に入っていくべき。その最初の入り口が地域である。

○小林

ともに生きるということ、共生ということだと思う。地域にはいろいろな人たちがいて、そういう人間関係の豊かさを体験しながら、子どもたちが地域の方たちとともに生きていけることが大事なことだと思う。

○吉武

マーティンさんのお話を聞いて頷いたのは、規格化の方向はあまり持続的でないと。多様性と変化ということが持続可能につながるのだと。たとえば私たちの身体は何年かのサイクルで細胞がすべて入れ替わる。だけど私たちの外見は変わっていない。そこには大きな変化があるのだけれど、本質は維持される。それが持続的ということなのかと思う。

【第三部】

〈全員参加ワークショップ〉「もしも世界が 100 人の村だったら？」

進行 韓朱仙（横浜シュタイナー学園教員）

子どもの内的発達と ESD、地域とのつながりというテーマで「アクト・ローカル」な視点から学びを深めた後、今度は「シンク・グローバル」な視点での DEAR 教材の全員参加型ワークショップに取り組んだ。70 名近い人数でのダイナミックなワークショップは圧倒的な体験。世界のなかの文化的マジョリティとマイノリティの成りきり体験を経て、最後は世界の富の偏在を手にしたビスケットの数でしみじみ実感するフィール・グローバルな体験となった。以下に参加者の感想を引用する。



○「オラ！」と声をかけたら返事が返って来たときの喜び。やっぱり母語が通じる安心と通じない不安って大きいなと実感した。ココナッツサブレはもらわなくても良かったのかもしれない。それは、それで分け合えたとし、満たされたのかもしれない。何か後ろめたい味がした。

○頭ではなく体で「世界の多様性」を感じられたことが良かったです。住む場所、言葉、そして経済格差。一番印象的だったのはココナッツサブレを分け合った時、他を知らなければ少量でも満足できるのにも思ったことです。しかし、知ることなしに一步は踏み出せない。韓さんから、これまでのご経験がにじみ出ていたのが良かったです。

○ビスケットを貧富の差で分けると、2人しかいない日本人が裕福な方に入っている。たくさん食べられるから調味料にまでこだわるのだと気付いた。また、当たり前のようにになっている消費社会を見直していくことが必要だと感じた。

○アジア人が多いことや得られる食糧の割合など、知識としてはわかっていたことでも、実際に「こういうことなんだ」ということが視覚的にわかるとやはり考えさせられる。また、最も貧しい層のグループであったが、求めているのにクッキーを渡され何とも言えない空気が生まれた。「支援」も少し間違えると同じような状況を生みかねないと感じた。

この後、ユネスコスクール神奈川県連絡協議会を支援してくださってきた神奈川県立有馬高校の実践報告があり、クロージングでは、玉川大学教育学部(ASPUnivNet)の小林亮先生、東海大学教養学部(ASPUnivNet)の小貫大輔先生、聖心女子大学の永田佳之先生、ローソン夫妻による総評をいただき、全プログラムを終了した。

(まとめ文責：佐藤雅史)

付録・大会総評

大会の終わりに、ESD とユネスコスクールの発展に尽力されている玉川大学の小林亮先生、東海大学の小貫大輔先生、聖心女子大学の永田佳之先生、そして基調講演ゲスト講師のローソン夫妻より、大会を振り返っての総評をいただきました。すべての先生方より、今回の大会は掛け値なく素晴らしい、密度の高い内容だったと、お褒めの言葉を賜りました。この大会の成果は、ユネスコスクール全国ネットワーク会議（2016年11月20日、東京）と第8回ユネスコスクール全国大会（2016年12月3日、金沢大学）の報告会でも報告される予定です（報告者は、それぞれ神奈川県立有馬高校・望月先生、横浜市立永田台小学校長・住田先生）。

小林亮（玉川大学教育学部教授）

これは率直な実感ですが、この第二回ユネスコスクール神奈川県大会は、今年に入ってからいちばん大きな学びがあった会だと思います。私にとって最大のプレゼントでした。本当にありがとうございました。

ふたつだけ申し上げさせていただきます。ひとつは、今回は第二回ですけれども、実際には4回目ですね。2013年に横浜市立永田台小学校の住田校長が中心に交流会を提唱されて、横浜国立大学鎌倉中学高校で第1回の研究会が行われました。これも素晴らしい最初のミーティングでした。2014年には神奈川県立有馬高校の望月先生のところで第2回の研究会が行われました。そのときは参加できなかったのですが、とてもよい会だったと伺っています。そして第3回が、去年、小正校長の横浜市立幸ヶ谷小学校で開かれ、これが公式の第1回ユネスコスクール神奈川県大会になりました。そして今回。こんなふう



に回を重ねてきたことで、間違いなくひとつの歴史ができつつあるということと、神奈川県ユネスコスクール・コミュニティの実態が形成されてきたことを強く感じ、たいへん勇気づけられました。

私も神奈川県ユネスコスクール連絡協議会のメーリングリストに入れていただいているのですが、ここ2ヶ月くらい、多いときには数十通のメールが日々飛び交っていました。そのような準備されてきた横浜シュタイナー学園の皆様、とくに事務局のご苦勞があって、この素晴らしい大会があったのだと今、実感します。本当にお疲れ様でした。

第二に、ESDの大事な要素にインクルージョンがあります。すべての人を仲間にして誰も排除しないという、そういうメッセージがあると思いますが、今日の大会ほどそのメッセージが強く伝わった大会はないのではないか。言葉だけでなく体感を通じて伝わった大会はないのではないかと思います。これは本当に率直な実感です。その内容が本当に素晴らしかった。登壇者もゴールデンキャストと言っていいと思います。

朝のマーティン・ローソン先生の基調講演は本当に素晴らしいものでした。長年にわたってシュタイナー教育に携わってこられた経験に基づいて、ESDを人間の発達の側面から体系立ててくださった。私にとって、ESDの新しい理解を得ることのできた新鮮なお話でした。私の「劣等感をもった子どもをど

うするのか」という質問に対して的確に答えていただきました。「先生に見られていること、聞かれていること、理解されていることを、子どもが感じられること」。これは私たち大人にとってもそうだと思います。人から受け入れられ、認められ、理解されているということは、いちばん大事だと思います。けれども、世界にはそうでない人たちがたくさんいる。さきほどの100人村ワークショップでそれを実感させていただいたことで、ESDの違った側面を照らしていただけたと思います。マーティン・ローソン先生の素晴らしいご講演に心から感謝を申し上げます。

そして、パネルディスカッション。いろいろな地域のつながりを通じた実践のなかでESDを実現していらっしゃる。しかも、この4人の先生方の実践が互いにリンクしていた。それぞれがばらばらなのではなくて、このつながりがひとつのコミュニティのあり方の表明なんだと、感動して聞いておりました。

そして午後の韓先生の「もしも世界が100人の村だったら」では、自分のなかにある何かが変わった気がいたします。同時に、すごく重い宿題を突きつけられた気もしています。事実、世界はうまく回っていないわけです。日本もうまく回っていないわけです。でも、私たちは傍観者ではいけない。何かを変えていかなければいけない。私たちは教育関係者として、学生たちも変えていかなければいけない。では、どうしたらいいのか、その結論はまだ出ていないと思います。非常に重い課題と大きな学びを与えていただきました。

韓先生は韓国籍をおもちということです。日本は今、近隣諸国とうまくいっていない側面が大きいわけですね。では、日韓の和解はどうしたら可能になるのか。それができてこそそのESDだと思います。日中、日韓の和解ができてこそ、ESDの新たな展開があると思います。そんなことも次にはぜひお聞きしたいと思います。

マーティン・ローソン先生、パネラーの先生方、韓先生、その他すべての先生方に心から御礼申し上げます。とくに、横浜シュタイナー学園の先生方には、おめでとうございますと心から申し上げたいと思います。

小貫大輔（東海大学教養学部教授）

さきほどの振り返りのグループで話をしたときに、「ああいうこと（100人村ワークショップの体験）を知るということが大切ですよね。知らないで別々の部屋に別れていたら、たいへんなことになりますよね」と言ったのですが、それを言った上であらためて思うのは、「知っているだけじゃだめですよ」ということです。100人村のワークショップでビスケットの配分を予想したときも、第一のグループは最初から60枚くらいと言っていましたし、みんなそんなものだろうと知っているのです。でも、知っているということが事実になってしまっただけで、当たり前のことになってしまっただけで、こんなに恐ろしいことはないと思うのです。

知るということが変わるということにつながるのなら、無責任に知るということだけではいけないのだということ、つくづく思います。知るということが変わるということにつながるだけではない、自分が変わることが世の中を変えるということにつながっていかないとはいけません。そういう意味で、朝のマーティン先生のお話が思い出されます。子どもたちの年齢に応じて様々な体験



をさせていく。体験をさせたことが、頭の中だけで終わるのでなくて、その子どものあり方を変える。頭が忘れたときに身体が身につけているということ、年齢に応じてステップ・バイ・ステップで実現していくということをマーティン先生はお話されたと思います。

そのように変わることが大切だと思う一方で、日本で生活していると、どんどん社会が保守化していきますよね。ほんとうに、めきめき保守化していく。それは自然の成り行きで、ある意味止めようがない状態。なぜかという、日本は明らかに高齢化が進んで、政治的にはどんどん保守的な結論しか出さないように、毎年その傾向が伸張していくことがわかっているわけです。

保守化するという事は、それだけでは悪いことではないと思います。日本のなかで私たちが守らなければならないこと、とても大切だと思っていることは確かにあるから。それを守ることはとても大切で、私たちが誇りに思えるような守りたいものがあることはとても大切なことだと思います。

私は長くブラジルのスラムでボランティアをしていました。そのシュタイナー教育のグループで活動していたので、こちらの学園とは古くからの知り合いなのです。そういう外の世界から見たときに、日本の世界には間違いなくうらやましいと思えることがある。それを守ることはとても大切だと思う。

日本を「和」というふうに昔から言うじゃないですか。外から見たときに、それが本当に一言で日本のことを表現している言葉だと思います。だけど、それを守ろうとするときに、守るために犠牲にしていることが山ほどあると思うのです。守ることのために他のことを犠牲にしてよいのか。「和」というものを最初から子どもたちに与えるわけにはいかないですね。子どもたちが自分たち自身であらためて「和」というものを、他のことを犠牲にしないで築いていくこと。そのことを助けてあげなければいけないと思うのです。守ることは大切なんだけれども、ただ守るのではなくて、作り直していく。つまり変わりがながら大切なものを作り直して、それを自分のものにしていくということが本当に大切なんだと今日はずっと思っていました。

ユネスコスクールというのは、日本の世界が変わっていく、私たちが変わっていくためのネットワークだと思います。そうあるべきはずのユネスコスクールのネットワークを見渡したときに、全国的に見ると、上意下達のなかで「みんなユネスコスクールになりなさい」というようなことをやってしまうような国、教育行政のなかで、変わらないためのユネスコスクールが広がっていることも事実です。

そのなかで本当に嬉しいと思うのは、神奈川では実践している人たちのなかから活動がわき上がってきてここまでたどり着いた運動だということです。そのグループに参加できることはすごく嬉しい。しかもそれが学校として認められていないシュタイナー学校で開かれた。子どもたちにとっては毎日通う自分の唯一の学校です。でも、その学校を学校と呼んではいけないという法律があるわけです。そんな学校が参加するネットワークの中で、今日、こういう会が開かれたことが、とても象徴的に神奈川県ユネスコスクールのあり方を表している。変わっていく力をよく体現していると思う。

東海大学はこういう神奈川県ユネスコスクールを応援していく立場にあって、去年からこの神奈川県大会にも参加させていただいています。それと平行して、大学の若い人たちが中心になって、ユースセミナーというのを毎年やっています。いろいろな学校の子どもたち、主に公教育の若い先生、高校生と大学生中心の会を一泊二日でやっていて、すごく楽しいです。

今年はちょっと雰囲気を変えて、「神奈川県の特徴のある学校と知り合いましょう」というのをやったんです。朝鮮学校や中華学校のように神奈川にはいくつものインターナショナルスクールがあって、それがすべてシュタイナー学校と同じで学校と呼んではいけない学校なのです。たいへんな苦境に立たさ

れて、厳しく差別されている学校の子どもたちです。その朝鮮学校の子どもが中華学校の子どもと初めて出会って、それぞれの体験を話してくれて「ああ、そうなんだ」と。インターナショナルスクールの子どもたちもいて、通訳が必要だったりするなかで、一泊二日の時間を過ごしました。

そこで起きていることはすごくエネルギーで、今まで人と対等の立場で付き合うことを認めてもらえなかった子どもたちが、初めて学校を超えてまったく違う背景のある学校の子どもたちと一泊二日で過ごす様子は、見ていて本当に楽しかったです。

じつは昔、ぼくもシュタイナー学校に子どもを通わせていたのですが、そこは運動場のない学校でした。運動場のない学校の子どもたちは、広いところに連れて行くと大喜びです。広いところに着いた瞬間に走りまわります。向こうに行ったら、またこっちに帰ってきて。合宿で同じような子どもたちを見て、そういうことを思い出しました。よその学校との出会いのない、緊張感のある学校から来ている子たちが、ああいう環境で一緒に過ごすと本当に話がはずみます。これからもできたらいいなと思います。

そういうことができることが、ユネスコスクールのだと思うのです。そう言った上で、ちょっとすごいことを言うと、でも、朝鮮学校はユネスコスクールになれるのかというとても厳しい現実があります。シュタイナー学校がなれるのだからなれるだろうと思いますが、はっきりと難しいと言われているのですね。

そんなことでいいのかなと思うのです。そのことを知った上で、自分が変わって社会を変えことにならなければなら、やっていることはただつらいだけです。つらいことをただ当たり前のことなんだと受け入れることで終わってしまっただけだと思いません。知ることが世の中を変えることに必ずつながるような、そういうネットワークであってほしいし、そういう教育であってほしいなと思います。どうもありがとうございました。

永田佳之（聖心女子大学文学部教授）

ぼくは要所要所でこの学園におじゃましています。2005年ですか、オルタナティブな学校ではない学校の研究をしたときに、当時の事務局長の小林真紀子さんにインタビューしてたくさん学ばせていただきました。何度か子どもたちがいるところにおじゃましたり、霧が丘の校舎でのユネスコスクール・プレート贈呈のときもそうでした。なんでしょうか、この一貫した印象は。わくわくする場。詩的な空間で、深まりをもたらしてくれる時間が流れている。今日もそうでした。今日はちょっとわくわく感が強いですね。



今日、一日参加させてもらって、なんとなくヒントがわかりました。なぜこの熱が貫けるのかなと考えると、一言で言うと、内発的な営みの体験があること。この学校をつくられたときから、人間の内的な力みたいなものを一貫して大切にされていて、それを譲らない魂みたいなものをもっていらっしやると思いました。

今日は参加者の様子を後ろまで見ていることが多かったんですが、いいばらけ方で、いい賑わいで、これぞダイバーシティ。多様性とはこういうことを言うのかと思いました。

ローソン先生もおっしゃったのですが、ユネスコ本部がシュタイナー学校と正式に出会う大規模な展示会がユネスコ本部であったのです。そのときの仕掛け人が、ニーデルマイヤーというユネスコスクール担当の女性職員で、今はもう早期退職されておやめになっていますが、私はその人と一緒にユネスコの仕事をしてきました。内発的なものをつぶそうとする力はユネスコの中にもありますし、ユネスコの外にもたくさんあります。彼女はそういうなかでずっと抗って来た人です。

こういう暗い雲が取り巻いている場面は、ひとつの学校を取り出しても、ユネスコという組織を取り出しても、何度もあると思うのです。それを払いのけているのはやっぱり人で、それはぼくから見ると奇跡なんです。まともにやっていたら続いているはずがないという学校が続いていたり、そういうとき「ああ、守られているというのは、こういうことなんだな」と思う。そういう守り神みたいなものを引き寄せているのもやっぱり人で、そういうのを奇跡と言うのかなとぼくは思っています。

そのニーデルマイヤーさんが南アフリカで人権侵害を受けたのを目の当たりにしたこともあるのですが、先ほどの小林先生と小貫先生の言葉を聞いて、彼女の言葉を思い出したのでシェアさせてください。彼女は世界のユネスコスクールの仕事をいろいろやっていました。たとえばバルト海はヨーロッパの北側にあって9カ国ぐらいが面しているところですが、そこで起きている深刻な環境問題をユネスコスクールなどを通して子どもたちと先生方が実際に変えていった。彼女は「本当の教育というのは、問題の一部だった学び手がソリューション（解決）の一部になる、そういう教育なんだ」と言いました。ユネスコはESDのことを変容型の教育と言っているのですが、彼女の言葉を聞いて「あ、それが変容と言うんだな」と思いました。

今日もローソン先生のお話にあったのですが、今、教育界にはグローバルスタンダードと言われている暗いシステムがあらゆるところに押し寄せてきています。もう、中学どころか幼稚園にまで来ていて、教育が当たり前そこに組み込まれてしまっています。そこで私たちはどうやっていったらいいのか。本当に崖っぷちだと思っています。そのなかで、こうやって背景もまちまちな人たちが集まって賑やかな場をつくるのが、ものすごく大切だと今日実感しました。だからみんなで、わくわくしながらグローバル標準に抗いましょう。今日はその大きな第一歩だと思います。去年が正式には第一回目ですが、今日はシュタイナー学校でやったからそれを実感できたのかなと思っています。

世の中でシュタイナー学校やオルタナティブと呼ばれている学校の存在はものすごく大切で、それらと公立学校がこうして一緒にやることの大切さ、それは押し寄せているとてつもない危機にいかにかという共通認識の第一歩なのかなと思いました。ぜひこれを続けてください。応援させていただきます。

マーティン・ローソン

(キール教員養成校責任者、
国際ヴァルドルフ・カリキュラム策定委員)

この大会から凝縮されたエッセンスを受け取りました。それをじっくりと味わいたい気持ちです。この大会がシュタイナー教育について聞いて、見て、体験してもらええる機会として少しでも貢献できたと思っています。オルタナティブ教育のすべてがよいとはかぎりませんが、オルタナティブ教



育が存在することがひとつの教育だけが可能なあり方ではないことを示しているのです。自然界のなかでは多様性がとても重要です。人間の世界においても同様です。ひとつの考え方、哲学からつくられたものであっても、もっと別なオルタナティブなあり方が可能でないとしたら、「物事はこういう違ったあり方もできるんだよ」という可能性から閉ざされてしまいます。

永田佳之さんがバルト海を囲む国々についておっしゃったことはとても興味深いものでした。バルト海を囲む国々に共通のことがあります。フィンランド、ロシア、エストニア、ラトビア、リトアニア、ポーランド、ドイツ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン。これらの国々には、政府によってつくられたシュタイナー学校が存在します。多様性を本当に享受するためには、限られた人たちだけでなく、多くの人たちがこのような教育に普通にアクセスできる環境を提供することがとても大切です。誰に対しても門戸が開かれていて、誰でもそれを享受することができる必要があります。限定された人たち、たとえばこの教育にお金が払える人たちだけのものであってはなりません。バルト海を囲んでいる国々はそういった価値を理解して、ロシアであっても政府によってシュタイナー学校がつけられているという事実が存在します。

PISA の学力テストで常に上位を占めているフィンランドは、世界のどの国よりも政府が教育にお金を投じています。フィンランドの経済は落ち込んできているのですが、教育に関しては予算を減らさずに投資し続けています。それは、教育が国の未来を左右するものだからです。その未来の一部にはよいシュタイナー学校をどの都市にもつくるのが含まれています。教員たちがシュタイナー教育の教員養成を受けることができ、建物が提供されて、多様な教育が生まれます。このような多様な教育に人々がアプローチできる、この意味での公平さをつくるのが大事です。

最後にお伝えしたいことがあります。それは他の文化をもつ若者たちと「出会う」ことができる若い世代を育てることが、教育の大切な目標だということです。まずはひとりの人間として出会う。そしてその後で、それぞれの文化に依拠している価値観を知る。たとえそれが様々な問題を抱えている文化だとしても、それは言い得ることです。あまり好きになれない文化もあるかもしれない。社会体制が閉ざされていて、オープンではない国や文化もあります。そこにはいろいろな歴史的な問題が横たわっています。でも、いまの若者にその歴史的責任があるわけではないわけです。彼らが責任を負っているのは、未来に対してです。ですから私たちは大人として、若い世代の人々が互いに出会うことができるような状況を用意してあげなければいけません。もちろんヨーロッパにも課題は存在します。アジアはアジアで同様な課題を有しています。

最後に、皆様と日本語でお話できないことを、申し訳なく思います。皆さんのことをもっと識りたいと思っています。ありがとうございました。

ウルリケ・ローソン（国際ヴァルドルフ・カリキュラム策定委員）

今日はとくに、100人村のワークショップで体験したことが、たいへん響いています。マーティンが午前の話で、ただ知識を知ることと体験することは違うことなんだと言ったことに呼応する体験だったと思います。私は外国語の教師であり、生物学の教師でもあるのですが、持続可能な生き方、持続可能な環境のための教育という考え方にとっても共鳴します。



最後にひとつ実現したい思いがあります。さきほどのワークショップで年齢別に分かれたときに、いちばん大きな集団は大人の集団でした。子どもというのは未来をもたらす存在です。私たち大人は、子どもたちに対して生きた見本にならなければいけないのです。私たち自身が、「この世界は素晴らしいところなんだよ、この世界を楽しむことができるんだよ」ということを子どもに見せてあげなければいけません。もしも大人が、「子どもたちが未来をつくるのだから、子どもたちが変わればよい」と考えるなら、そこには危険が潜んでいます。「大人は世界を変えたがっている、実際に変えている」と子どもたちが知ることができれば、子ども自身も時代をよい方向に変えていくでしょう。ですから、我々大人がまずスタートしなければならないのです。

その際、世界の問題について子どもたちに「どのように伝えるか」ということが課題です。あまりにも悲観的な問題を子どもたちに伝え続けたとすれば、子どもたちは尻込みをしてしまいます。そこにはバランスが要求されます。まずは「世界は素晴らしい場所だ、多様性を享受できる場所だ」と、子どもたちが安心して感じられるようにしなければいけません。そして彼らが高校生になる頃に、どのようにポジティブなやり方で世界の問題に変化をもたらしていけるのかを彼らが考えられるようにします。

持続可能な社会をつくる教育を考える上で、ここにも年齢に応じた子どもへの対応が要求されます。もちろん、どの年齢の子どもであっても何かしら世界に役立つ行動を起こすことはできます。けれども、それには年齢にあったやり方というのがあるのです。今日はたくさんよいお話を皆さんからお聞きすることができました。大切に持ち帰りしたいと思います。ありがとうございました。

2016年8月27日 第二回ユネスコスクール神奈川県大会・プログラム

9:30	開会：総合司会・所澤新一郎（横浜シュタイナー学園保護者） アイスブレイクタイム：進行・韓朱仙（横浜シュタイナー学園教員） 基調講演：マーティン・ローソン「子どもの内的発展に即した ESD 実践の可能性」
11:40	パネルディスカッション「地域資源とネットワークで育てる ESD」 進行 佐藤雅史（横浜シュタイナー学園事務局長） パネラー 吉武美保子（横浜市にはる里山交流センター職員） 小正和彦（横浜市立幸ヶ谷小学校校長） 広木敬子（横浜市立永田台小学校教務主任） 小林裕子（横浜シュタイナー学園教員）
12:40	ランチ（霧が丘の知的障がい者就労支援 NPO「ぶかぶか」のお弁当）
13:15	霧が丘校舎「シュタイナー幼児教育・神奈川フェスタ」ツアー（15名）
13:40	学園紹介 DVD 上映（9年生劇「ガリレオ」ダイジェスト）
14:00	全員参加型ワークショップ「もしも世界が100人の村だったら？」 進行 韓朱仙（横浜シュタイナー学園教員）
16:10	振り返りとクロージング
17:10	各校自由交流&情報交換
*懇親会	

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会とは

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会は、神奈川県地域のユネスコスクールや ESD に取り組む学校や大学が、顔の見える関係からユネスコの理想実現への取り組みを築いていこうと、2年の準備期間を経て2015年12月に発足しました。現在、8校のユネスコスクールと2校の ASPUnivNet 加盟大学がゆるやかにつながり、大会の開催や情報交換を中心とした活動を行っています。

事務局 神奈川県立有馬高校（担当：望月）
〒243-0424 神奈川県海老名市社家 240
TEL：046-238-1333 / FAX：046-238-7980

加盟団体	神奈川県立有馬高等学校	湘南学園中学校高等学校	玉川大学教育学部(ASPUnivNet)
	横浜国立大学附属鎌倉中学校	横浜国立大学附属鎌倉小学校	東海大学教養学部(ASPUnivNet)
	横浜市立幸ヶ谷小学校	横浜国立大学附属鎌倉中学校	
	横浜市立永田台小学校	横浜シュタイナー学園	

設立経緯および活動報告

2013年8月1日

第1回神奈川県ユネスコスクール・セミナー
於：横浜国立大学附属鎌倉中学校

2015年1月10日

第2回神奈川県ユネスコスクール・セミナー
於：神奈川県立有馬高校

2015年8月1日

第1回ユネスコスクール神奈川県大会
於：横浜市立幸ヶ谷小学校

2015年9月19～20日

東海大 UNESCO ユース・セミナー
「未来の学校について考えてみよう」
於：東海大学湘南キャンパス

2015年12月4日

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会準備会議
連絡協議会発足
於：神楽坂 ACCU 全国大会プレセミナー会場

2016年3月28日

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会ミーティング
於：横浜シュタイナー学園十日市場校舎

2016年7月29～30日

東海大 UNESCO ユース・セミナー
「今年のテーマは多文化共生！」
於：東海大学湘南キャンパス

2016年8月26日

環境省「つなげよう、支えよう森里川海」フォーラム
賛同事業・ESD 夏期研修会
於：八景島シーパラダイス

2016年8月27日

第2回ユネスコスクール神奈川県大会
於：横浜シュタイナー学園十日市場校舎

資料作成：2016年12月